

## 教員養成に落語の力を

——早稲田大学教職選択科目「国語科授業技術演習」の取り組み——

金井 景子・上西 辰延・榎本 隆之

キーワード：教員養成、国語科、落語、マイクロティーチング、教壇実習、伝統芸能、教職、声

**【要 旨】** 本論文では、落語の稽古および実演と国語科の教壇実習とを組み合わせた早稲田大学教職関連科目「国語科授業技術演習」という授業実践が、中等教育国語科の教員養成において、どのような可能性を拓き、また課題を見出したかについて検討している。教育現場では、学習指導要領の改訂に伴い、いずれの校種においてもこれまで以上に、「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視」することや「伝統や文化に対する教育の充実」が唱導されている。このことをかんがみる時、落語という日本の伝統芸能において培われてきたさまざまな力を、国語科の教員養成において援用するという、類例のない取り組みを行うことには意義と可能性がある。大学教員と高校教諭、そして現役落語家の三者が、相互に協力し、実践型の授業を創り上げた。授業の発想の根底には、落語と国語がいずれもなんらかのテキストを届けるといふ共通点を擁しているという認識がある。落語の場合は古典落語の伝統のなかで培われてきたネタを、それぞれの落語家がどう料理して、そのときどきの聴衆に届けるかという工夫の中に芸がある。一方、国語もまた、古今東西のテキストを学習者に紹介し、そのテーマなり表現方法なりコンテキストなりを学習者に理解させるという過程を必然的に含む教科であり、その実践を担うのが国語科の教員である。落語にしても国語にしても、それぞれのテキストをいかに的確に聞き手に届けるかというところに、発信者の工夫のしどころがある。準備のためのプロジェクト、2012年度正規授業、2013年度正規授業と実践を重ねて、当初は、「落語の力」=観客に断を効果的に聴かせる伝統の中で培われてきたテクニックの習得、という漠然としたイメージしか結ばなかったものが、話す／聴くという相互の信頼関係に基づいた場を創る能力というものへと展開していったのは、大きな成果であった。また、場を創る能力というものの理解において、大きな役割を果たしてくれたのは、LMSを用いたネット上の意見交換や、教材となる落語の動画、成果発表の際に録画した受講生たちの実演動画の視聴である。落語の実践とLMSの新たな利用法を合体させたところに、本授業の国語科教員養成に資する可能性がある。

### (1) はじめに

早稲田大学に2012年度より設置されている教職選択科目「国語科授業技術演習」（2011年度までの名称は「授業技術演習C」、2012年度より名称改称）は、大学の教員（早稲田大学教育学部国語国文学科専任教員の金井景子）が企画し、現役の教諭（早稲田大学高等学院国語科の榎本隆之）と現役の落語家（金原亭馬治<sup>1</sup>、本名・上西辰延）とが協議・検討を重ねて実施する、他に類例のない授業である。2010年度に、金井の呼びかけに応じて協力を申し出てくれた大学院生たちや高校の現役国語科教諭に、金井と上西とで作成した先行プログラムに参加してもらい、2011年度にその成果発表と検証作業を行った。その反省を踏まえた上で、榎本に加わってもらって、

2012年度の前期から正規の授業として2カ年、実施した。

本論文では、落語の稽古および実演と国語科の教壇実習とを組み合わせた「国語科授業技術演習」という授業実践が、中等教育国語科の教員養成において、どのような可能性を拓き、また課題を見出したかについて検討する。なお、当該の授業は2014年度以降も継続し、今後も「一席は噺が出来る国語の先生」を輩出する予定である。また、この試みを公開することで、各地で教員養成に落語の力を援用する動きが活性化し、落語を楽しみつつその伝統や技に深い崇敬をもって対し、自身の授業パフォーマンスの研鑽に活かす教員志望者や現任教諭が、一人でも増えることを切望している。

落語は、世界中探してもこれほどシンプル（たった一人で、座ったまま演じる）かつゴージャス（登場人物を幾人登場させることも、場面を幾度転換させることも、演者の思いのまま）な話芸はない、ユニークな芸能である。400年にわたる歴史をもつ伝統芸能である落語<sup>2</sup>は、寄席を舞台にして各地で親しまれてきたが、ラジオ放送のエンターテインメント部門のコンテンツの重要な一角を占め、テレビにおいても『笑点』などの長寿番組をすぐさま思い浮かべられるように、日本のお茶の間を賑わしてきた<sup>3</sup>。とはいえ、今日のメディアを想定すると、バラエティ番組は花盛りでコントや漫才、モノマネといった芸に触れる機会は多くあるものの、児童や生徒たちにとって、じっくりと落語を聴くことのできる番組に出会うのは稀である。

国語教科書の現場に目を向けると、2000年4月から教育出版の『小学国語四年生』に三遊亭圓窓の口演に基づく「ぞろぞろ」と「寿限無」とが採択・収録されることになった。教科書に採択されるという報を受けた1999年7月に同師は「現代では、人の話を聞いてその状況や場面を頭に描くという、コミュニケーションの原点がテレビやゲームの視覚的情報の勢いに押され、崩壊寸前といっても過言ではない」「以前からその傾向に心を痛め、「学校教育に落語は必須科目」を高座から訴えてきました<sup>4</sup>」と喜びを語ったが、その後の『話す・聞く・思い描く力を育む落語の授業<sup>5</sup>』においては、教科書への掲載がスタートした直後から「文字で落語を伝えるというのは本当に難しい」「先生方から「どうすればいいのか」という問い合わせが殺到」したために、師自らが足繁く小学校に通って、前半を落語のレクチャー、後半を落語のライブという形式の授業実践を重ねることとなったと報告している。同書に収録されている実践記録は、教室全体の生徒たちと師が徹底した対話で授業を進める画期的なものであるが、これをまったくスキルのない現場の教員がなし得るか考えると、一定期間の研修を経るのでもなければ荷が重いと言わざるを得ない。むろん、教科書にはDVDで同師が実演する「ぞろぞろ」や「寿限無」が補助教材として用意されているのだが、芸能の魅力は、ライブでその場を共有するときにこそ最大限に発揮されるのであって、現場の教師体験がある者ならば、教室で著名な俳優たちが熱演する朗読のテープを流しても、10分もすればあちこちで居眠りが始まることを経験的に知っている。

落語に限らず、伝統芸能全般に言えることであるが、それを面白いと感じる経験を持ったことのない教員が、その芸能について良き紹介者足り得るはずもなく、ましてやそこから自身が何かを学ぶということは困難であろう。教師の側が、教員養成の段階で、自身が落語という話芸に取り組み、自身の授業パフォーマンスに活かすという、主体的な関わりを持ったことで、落語に積極的な興味を持ち、以後も関心を寄せて、生徒たちに紹介し得る存在になり得ることは、今回

の先行プログラムや2012年度、2013年度の授業の受講生たちが証明してくれている。幸い東京には、国立演芸場をはじめ、浅草演芸場や新宿末広亭、鈴木演芸場、池袋演芸場など常設の寄席があり、地方でも都市部では盛んにホールやライブハウスで落語会が開催されている。求めればDVDやCDに収められた古今東西の名人たちの芸に触れることもできる。日本の伝統文化理解のナビゲーターとして、国語科教員の果たす役割が大きいことは言うまでもないことであるが、まずは落語を教員養成に活かすという入口から、この課題にアプローチすることも出来ると考えている。

教育行政との兼ね合いに目を向けると、文部科学省は「国語力を身に付けるための国語教育の在り方<sup>6</sup>」として、2008年1月に出された中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」の教育内容に関する主な改善事項の第一に、言語活動の充実が示され、続く同年3月に告示された、「小学校学習指導要領」においては、国語科のみならず国語科以外の各教科等においても言語活動の充実が求められることとなったのは周知の通りである。つまり、言語活動の充実は、各教科等を貫く重要な改善の視点となったのである。その際、国語をはじめとする言語は、知的活動（論理や思考）だけではなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあり、国語科において、これらの言語の果たす役割に応じ、的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して伝え合う能力を育成することや我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する必要がある。

その上で、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を組み合わせた指導を推進し、日常の言語生活においては、「聞く」「話す」「読む」「書く」というそれぞれの言語活動が複雑に組み合わされて用いられているのが普通である。国語教育においても、この点を考慮して、「聞く」「話す」「読む」「書く」という言語活動を有機的に組み合わせて指導していくという観点が大切である。その際、既に述べたように、国語力の中核である「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」の四つの力が具体的な言語活動として発現したものが、「聞く」「話す」「読む」「書く」という行為であることを踏まえて、「聞く」「話す」「読む」「書く」の力を伸ばすためには、国語力の中核である「考える力」などの四つの能力を伸ばすことが必要であるという認識に立つことが重要であるとの指針を示している。先に挙げた『話す・聞く・思い描く力を育む落語の授業』において圓窓師が述べる落語の力を想起する時、こうした学力を創成するに際して小学校教材に留まらない可能性を秘めていることは容易に想定出来る。

また、2005年度に東京都の重点事業として「日本の伝統・文化理解教育推進事業<sup>7</sup>」を立ち上げた東京都では、「国際社会に生きる日本人としての自覚と誇りを養うとともに、多様な文化を尊重できる態度や資質をはぐくむ教育を推進する」目的のもと、「日本の伝統文化理解教育推進校」を幼稚園から特別支援学校にいたるまで60校指定して、さまざまな取り組みを展開しているが、残念なことに落語への取り組みは一校も見当たらない。

小学校では2011年度、中学校では12年度、高等学校では13年度から実施された学習指導要領の改訂においては、いずれの校種においても「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視」することや「伝統や文化に対する教育の充実」が唱導されていることをか

んがみる時、「国語科授業技術演習」の企画および実践者であるわたしたちは、小学校の国語教科書の一角を占めるようになった「教材としての落語」を、中等教育国語科の教員養成に援用するという試みへと拡げることにもまた、伝統芸能をいたずらに礼賛するに留まらず、その時を超えた潜勢力を抽き出すことになると考えている。

なお、本授業の前身となったのは、2006年度文部科学省採択専門職大学院等教育推進プログラム「言葉の力を創成する教員養成プログラム—世界へひらく国語教育のために—」の一環として実施した、「インテンシブ・コース」の授業「身体で学ぶ教育講座」の「マイクロティーチングの新たな活用法」である。上記のプログラムは、早稲田大学教育学部国語国文学科が主体となって、2006年度と2007年度に実施した教員養成GPで、「マイクロティーチングの新たな活用法」は金井景子を中心となって企画・運営したものである。

「マイクロティーチングの新たな活用法」を創設するに際して、直接の影響を受けたのは、先行する教員養成GP「教育臨床を重視した教員養成強化プログラム—開放制を基盤とした早稲田モデルの提案—」（2005年度文部科学省採択専門職大学院等教育推進プログラム）において三尾忠男が中心となって実施していた「インテンシブ・コース」の授業「授業技術演習」であった。教科の枠を超えて、自身の授業パフォーマンスの向上を企図する学生たちが、10分程度に時間を区切って自身の授業実践を生徒役の学生たちの前で行い、それを画像に収めて検証・討議するというマイクロティーチングの手法を用いた授業であった。当時のパイロット版の授業は現在、早稲田大学の教職選択科目「授業技術演習A・B」として提供されている<sup>8</sup>。

「マイクロティーチングの新たな活用法」は2008年度より「授業技術演習C」として、「授業技術演習A・B」の後を追う形で授業化した。中等教育国語科に特化したマイクロティーチングとして、小説、評論といった教材のジャンルに焦点化したり、導入部や展開部、結論部といった授業展開に対応したもの、紙媒体の教材と電子媒体の教材の特性を活かした扱い方など、さまざまな工夫を重ねてきたが、授業名の改変を期に、国語科ならではのマイクロティーチングを目指して、「教員養成に落語の力を活かす」という大胆なカリキュラム改変を行った。今後、各教科でそれぞれの「授業技術演習」が実施されることも視野に入れつつ、「国語科」の場合の実践の詳細を提示しておきたい。

## (2) 「国語科授業技術演習」のカリキュラム編成

### 2-1 「国語科授業技術演習」のカリキュラム概要

当科目の概要は次の通りである。

教育学部の「広域科目」、2単位（1 Semester）（90分×15回）の設定で、おもに教職課程国語科を履修中の学部2・3・4年生を対象とした科目である。担当教員は2名で、落語家と国語教育専攻担当者の組み合わせである。履修学生数は12名（2012）14名（2013）であった。以下、科目の目標および特徴について紹介する。

科目の目標は、次の3点においている。

- ① 国語科教員としての基本的な身体技法（発声など）を身につけること。
- ② 落語の語りを応用して、授業導入や教材導入などの工夫ができるようになること。

- ③ 学習者の発達段階と関心に応じて、教材の難易度や授業の難易度を調節できるようになること。

この3点をひと言で表すならば、「洗練された語り芸」の養成である。ここでいう「洗練された語り芸」とはすなわち、まず、基本的な発声・発音、すなわちしっかり声が届くということであり、そのうえで指導の組み立て方、すなわち話の段取りを効果的につけられるということである。両者を高い次元で身につけ、国語科教員としての資質を高めることが、この科目の目標である。

科目の特徴として、次の4点が挙げられる。

- ① 現役落語家による語りの指導があること。
- ② 理論3割、実践7割。
- ③ 課外授業の機会が設けられること。
- ④ 希望者には、授業期間終了後に事後指導があること。

①については、落語家による実演（3～4話でそれぞれ5分～10分程度）を聴く機会があり、それについての解説がある。実演を聴いた後、受講生は任意でひとつの話を選び、落語にオリジナルの「枕」をつけて台本化し、それを自身で実演する。これがこの科目の、既存の教職課程科目と異なる最も大きな点である。

落語の実践を含めて、この科目は実技中心の講座である。ベースとなる技術（教室内で声がしっかり届くこと、話の段取りが明確であること、など）を繰り返し実践することで鍛える講座といえる。そのための理論的背景も扱うが、焦点は実践に置いている。理論に偏りがちな教科教育法の科目を補填する意味合いも含まれている。

課外授業として2種類の見学機会が設けられる。ひとつは寄席で、もう一つは授業見学である。そして、授業期間終了後に、希望する学生には、事後指導の機会が用意されており、落語実践のさらなる研鑽を積むことができる。

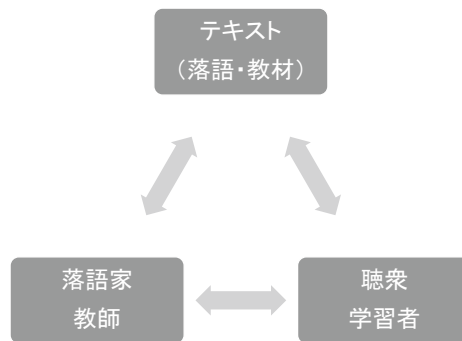
15回の授業内容と担当者は次の通り（2013年度）。

回	授業日	担当者	授業内容
1	4月12日	榎本	国語科教員に求められる資質 理想的な授業の要素
2	4月19日	上西	落語① 落語の基礎 課題提示
3	4月26日	榎本	単元学習① 評論教材 MTの教材提示
4	5月10日	榎本	単元学習② 文学教材 MTの教材提示
5	5月17日	上西	落語② 朗読・演技指導
6	5月24日	榎本	マイクロティーチング①
7	5月31日	榎本	マイクロティーチング②
8	6月7日	榎本	(課外授業) 国立演芸場での寄席鑑賞
9	6月14日	榎本	マイクロティーチング③
10	6月21日	榎本	落語③ 朗読練習
11	6月28日	上西	落語④ 実演第1回
12	7月5日	上西	落語⑤ 実演第2回

13	7月12日	榎本	話し合いの実践と指導
14	7月19日	榎本	導入の工夫① 「枕」の効果 教材導入の工夫
15	7月26日	榎本	導入の工夫② 単元導入・授業導入の工夫

シラバスの構成は、落語に関する回と国語教育に関する回とが交互に組み合わされたかたちになっている。この構成により、落語の実践という体験を、国語教育の実践に応用することをめざしている。この科目の履修生は、15回の授業のなかで、落語を一席披露（原稿朗読1回、本番1回）するという体験とともに、模擬授業（マイクロティーチング）を課される。すなわち、まず自らの声と身体を使って確かめるという段階があり、そこで確認したことを国語科教材のうえで展開してみるという、2段階の実践がある。

これは、落語と国語がいずれもなんらかのテキストを届けるという共通点を擁していることに基づいている。落語の場合は古典落語の伝統のなかで培われてきたネタを、それぞれの落語家がどう料理して、そのときどきの聴衆に届けるかという工夫の中に芸がある。一方、国語もまた、古今東西のテキストを学習者に紹介し、そのテーマなり表現方法なりコンテキストなりを学習者に理解させるという過程を必然的に含む教科である。落語にしても国語にしても、それぞれのテキストをいかに的確に聞き手に届けるかというところに、発信者の工夫のしどころがあるといえる。そのことを概念図にしたものが下の図である。



## 2-2 2013年度カリキュラムのコア要素6点

次に、この科目のカリキュラムのコア要素6点について述べる。

- ① 実演を見て、その模倣をすること。
  - ② 複数の学生が、同一の落語ネタを扱い、各自が任意の枕を考案すること。
  - ③ (落語において) 異なる枕が、異なる効果をもたらすことを検証すること。
  - ④ (国語において) 異なる導入が、異なる効果をもたらすことを検証すること。
  - ⑤ 話し方を検証するとともに、聞き方の検証をすること。
  - ⑥ 独演のかたちに加えて、話し合いの場を設けて、それを検証すること。
- ①「実演」に相当するのは、第2・5・8・10・11・12回の授業である。プロの落語家の実演

を見て、学生がその模倣をするというスタイルは、この科目のベースである。とりわけ重要なポイントは、授業担当者である落語家一人が教室で実演するのを聴くという体験（第2・5回）に加えて、課外授業として寄席に足を運んで大勢の落語家の実演を比較しながら聴くという体験（第8回）の、双方が用意されていることである。双方の差異は、一人による実演と複数名による実演との違いであるとともに、そこに居合わせる観客（一方は履修学生のみ、他方は不特定多数の観客）の違いでもある。双方を体験することによって、落語がもつ「場の芸術」としての意味を立体的に理解した受講生は、こんどは自らが話し手となる体験（第10・11・12回）に臨むことで、その困難さと醍醐味とを味わうことになる。

②学生に与えられる落語ネタは4種類ある（2013年度の場合）。4種類のネタを14名の受講生が任意に選ぶ。従って、同一の落語ネタを3～4名の受講生が披露することになる。

③ここにこの科目の重要なポイントがある。同一ネタを扱う3～4名には、それぞれ異なる「枕」を考案することが求められ、結果的に異なる「枕」が複数出てくることになる。そして、それらを聴く側の受講生は、「枕」の違いが、元ネタの印象をいかに大きく変えてゆくかを体験することになる。「枕」の方向性によって、本題であるネタのどこに焦点が当てられるかが変わってくるためである。

④同様に、国語科における導入（授業への導入・教材への導入・単元への導入・学期への導入・年度への導入などさまざまなレベルの導入）が、本題（授業・教材・単元・学期・年度）の理解に大きく影響していくことを、模擬授業その他の場面において検証していく。これは、落語で体験したことを国語に応用して確かめる過程である。落語と国語の関わり方を、たんに発声・発音の訓練という狭いところに求めず、視線・姿勢・動きといった視覚的な側面、さらに言葉の選び方・組み立て方といった言語コミュニケーションのスタイルとして、この科目では捉えていく。

⑤話し方を育てる前に聞き方を育てる、というのもこの科目の不可欠な要素といえる。たとえば寄席に見学に行った後、その晩の演目について批評しあう場をネット上で設けたことがあった。各演者の風格の違い、キャリアの違い、芸風の違いについて、あるいは全体のプログラム構成の効果などについて、受講生たちは切れ味の鋭い批評を書き込み、また相互の批評のなかに新たな発見をしていった。そして、教室で受講生が落語を実践する際にも、それぞれの印象の違いが、たとえばほんのちょっとした声の高さの違いから生まれたり、わずかな姿勢の違いや視線の動かし方から醸し出されたりすることを意識できるようになっていった。

このようなかたちで、相互の聴き方を対比しつつ、受講生自身の「聞く力」を自覚させることは、「話す力」の向上に直結するとともに、「話すこと・聞くこと」をどう教えるかという理論的学習にも連動していく。「聞く力」「話す力」の向上を実感することではじめて、音声言語教育への自信と意欲が受講生に芽生えることになる。

⑥さらに、15回の講座の中に多くの「話し合い」場面を設けることにも大きな意味がある。教壇に立って大勢の聞き手を前に話す訓練は、もちろん重要な過程である。それは教員の資質としてとくに必要な要素である。しかし、全ての学習者に大勢の前で話す能力が求められるわけでは必ずしもない。大多数の学習者が必要としているのは、むしろ、建設的で生産的な話し合いの力

である。落語実践を経験することによって、教室全体に響く声（届く声）とはどういうものかを身に付けた受講生たちは、4～5人の小さな話し合いの輪においても、うまく届く声とはどういうものかを次第に意識するようになった。話の中身が、話し方によって大きく左右されていることを、回を重ねるごとに理解するようになった。

2013年度は、あるグループによる「話し合い」の様子を、他のグループメンバーが評価するかたちでメタ認知させる過程を設けた。具体的には、教員採用試験の（模擬）集団討議をさせながら、それを（模擬）試験官が採点する形式をとった。そうした例を含めて「話し合い」の場面を多く経験させることによって受講生は、相手が50人であれ、5人であれ、まさにメディアはメッセージであることをより深く認識できるようになった。そこに、たんに「話す」存在としての国語教師から、「話し方を教える」存在としての国語教師への展開の端緒があるといえる。

以上が、この科目のコア要素6点である。これらの相乗効果によって、従来の教職課程では実質的に養成することが困難であった「聞く力」「話す力」「話し合いの力」を、確実に向上させることができた。これらの6項目は、しかし、開講当初から全項目揃っていたわけではなく、2年間を通じて試行錯誤しながら固まってきた要素である。初年度（2012）と2年目（2013）では、指導内容の細部は異なっていた。次の項では、その差異について補足しておきたい。

本講座のカリキュラムのうち、2012年度の反省をふまえて2013年度で改善した部分はおもに、落語の題材、マイクロティーチングの回数、話し合いの導入、の3点である。

落語の題材については、2012年度が「地嘶」中心であったことに対して、2013年度が「前座嘶」中心であったことが挙げられる。具体的には2012年度に扱ったネタは「紀州」「テレスコ」「目黒のさんま」であり、2013年度に扱ったネタは「子ほめ」「牛ほめ」「真田小僧」「猫の皿」であった。2012年度は比較的長めで、かつ、理が勝る話が多かったのに比べて、2013年度は比較的短くて簡単な滑稽話が多く、後者はそれだけ演者の魅力を引き出しやすい条件が揃っていた。受講生にとっては、負担が少なく、個々のパーソナリティを出しやすい条件であった。次年度以降、題材を選ぶにあたって留意したい項目のひとつである。

次にマイクロティーチングの回数については、2012年度は各自2回であったものを、2013年度は各自1回に減らした。（これは落語実践を含まない回数である。）受講生にとって過重な負担であったものを軽くする意図に加えて、落語で学んだものを普遍化・理論化していく過程により多くの時間を割いたためでもあった。

最後に、話し合いの導入については、2012年度は独演のスタイルを実践・指導することに受講生も担当教員も集中していたのに対して、2013年度は、独演だけでなく、それ以外の「話すこと」のスタイルにも視野が広がったことを指している。とくに、落語実践の直後の回に話し合いの実践を設けたことが効果的であった。落語で培った声と身体の使い方を、別の状況において再点検し、定着させる機会となった。

### 2-3 2013年度の成果

この項では2013年度の成果について、受講生の感想を交えながら、3点に分けて考察する。



- ① 「声を届ける」技法の向上
- ② 「テキストを届ける」技法の深化
- ③ 導入開発技術の向上

### 2-3-1 「声を届ける」技法の向上

落語を実践した後の受講生がどのような感想をもらったか、いくつか拾って見てみたい。

まず目についたのは、話し手の身体（姿勢・表情・視線・動き）についての指摘が多かったことである。

- 姿勢ひとつで、声の通り方や表情が変わると思った。
- 姿勢が重要だというのは意外でした。
- 姿勢と視線と表情が大切なのだと思いました。聞いている人に安心感を与えられるかどうかのカギなのだ。
- 姿勢や表情までは意識していなかったが、たしかに授業を行う上でも大事だと思ったので、とても参考になった。
- 姿勢の良さって大切だと思った。目線の位置、手の位置など。
- 動作のくせというものが、他人から見ていてこれほど目につくものだとは思いませんでした。自分を外から見る意識を常に持とうと思いました。
- 話そのものより、話し方から受ける印象が大きいと思いました。
- 聴いている人が話に素直に入っていけるかどうかは、話す人の雰囲気によって左右されるなど思った。

このように、受講生の感想には、声に関するものよりは、むしろ姿勢や動きに関する言及が多かった。落語は「聞く」ものであると同時に「見る」ものでもある。座布団一枚の上での最小限の「演技」でありながら、上半身・下半身の姿勢、顔の向き、表情によって、その人の印象が大きく左右されることを受講生たちは発見した。座布団に座ってお辞儀をするだけで、まだひと言も発しないうちにその演者の印象が決まってしまう、というところに気づいて、見られる者としての意識を喚起していった。

授業内では、落語家が受講生一人一人の実践を論評した。身体に関しては、身体のクセが目障りであること・顔の向き・表情・姿勢・あいさつ・お辞儀の仕方などについての指摘があった。一方、発声発音に関する指導は、間・テンポ・声の質・量・声の向き（上・下）・語尾をのばさないことなどに及んだ。あえて沈黙を使う、という例なども実際に披露してもらった。その結果、声そのものについての感想ももちろんあったが、

- 抑揚をつけて話すということは意識したいと思った。落語から授業、日常の会話にまで落として考えることができるのだと思った。
- 他の人の話を聞いて、私自身は声がかもっていたなと改めて感じた。声をどこに届けたいかを意識したい。

声を出す以前の、心構えなり、聞き手への配慮なりについての感想も目立った。

- 聴いている人を気持ちよく、という気持ちを念頭に置きたいと思う。

- 落語の技術やそれらをどのように授業に活かすかといった話も、もちろん参考になるが、人前で表現する者としての心構えのような話がとても参考になる。
- 「笑わせる、じゃなく、笑ってもらう」という話があったが、とても大切なことだと思った。
- 落語家は「観客を疑わない（疑ってはいけない）」というお話をなさったが、教育実習に行った際に「生徒を疑わない」ことは本当に大切だなと何度も思わされた。

また、落語実践の後に行った話し合い活動についての感想では、聞き方・話し方への意識が高まったことが伺えた。

- 確かに、話し合いの際の自分の頭の使い方に変化があるなど実感しました。
- 一人で考えるよりみんなで考える方が短時間で集中してより良いものが出てくるなど思った。
- 「話せるようになった」と感じた。少しだけ。
- 話し合い能力、自分でも上がったと思います。
- 人の意見に対して真剣に向き合わない人は、いくらいいいアイデアを出しても評価が低いと思う。評価が高かった人というのは、発言が具体的だった人、根本的な問題に触れていた人、人の話をきちんと聞いている人だった。
- シャベリ方、気になりました。みんなはっきりしゃべろうよ！！（笑）

### 2-3-2 「テキストを届ける」技法の深化

次に、「テキストを届ける」（話の中身を理解してもらう）ことについて、受講生がどのように理解を深めたかを検証してみたい。話し手自身のテキスト理解の深さが、聞き手への伝わり方に如実に反映することについて、次のような感想があった。

- 頭の中に、話の筋をきちんと入れて、自分の言葉で話すことが大事なのだと思いました。
- 「自分の言葉でしゃべればテンポがよくなる」という言葉がとても大切だと思いました。自分の言葉でしゃべれば、余裕が生まれ、余裕があれば言葉に感情をこめたり表情を意識したりすることができる。そうすれば聴衆にも安心感が生まれる。何よりお客さんが良い心持で聴いていられるということを意識したいと思いました。
- 話をよく覚えてきた人は、その分だけ安心感があると思った。

表現者としての苦勞と醍醐味とを綴った受講生もいた。

- 話すときの姿勢や、見栄の切り方、声の出し方、そして準備段階での話のまとめ方、膨らませ方、枕のつくり方など、気を付けなければならないポイントが多く、落語の難しさを実感しました。しかし、自分の持てる表現力を駆使して、お客さんに笑ってもらえると「伝わった」という喜びがあり、その喜びは格別なものでした。

そして、表現者として人前に出ることが、教師として学習者の前に立つことに通じることを、次のようなかたちで認識していったことが確認できる。

- 色々な人の落語を見ましたが、考えていけばいくほど、話す技術や枕など、授業に似ている面が多いように感じます。
- 教師の立ち方、表情、板書、パワポ、対応などなど、教える内容以外にも多くのものが学

習者に提示されるのだと改めて感じました。

教師としての振舞い方・立ち位置・姿勢・表情・視線・言葉遣いといったものが重要であること、とりわけ国語教師はそれを自ら実践しつつ、学習者に指導する立場に置かれることを、受講生は次第に理解するようになった。その意味で、落語への認識の深まりは、教職への認識の深まりへと転化していったといえる。

敢えて落語という、畑違いに見えるジャンルに手を染めることにより、そこに用いられているスキルが教職に転用可能であることが見えてくる。そのスキルが「声を届ける」ことであり、「テキストを届ける」ことでもあり、さらにどのようにしてその世界にいざなうか、すなわちイントロのスキルでもある。それを次の導入の項で扱う。

### 2-3-3 導入開発技術の向上

国語科授業においては、導入のありかたがその教材や単元の理解度を左右するといえる。この科目では、落語という手段を用いて、まず声と身体を使って確かめる（第1段階）過程を経て、そこで確かめたことを国語科教材のうえで展開してみる（第2段階）という展開を用意している。その過程で焦点化するのが、落語の枕であり、国語の導入である。

導入の意義はもちろん、学習者の興味・関心・意欲を喚起することである。そして導入は、学習目的に直結したものであり、同時に学習教材に直結したものであることが望ましい。そのことを、落語の枕の開発という手段をもって理解してもらおうというのが、この科目の眼目である。

- 導入によって伝わるものが全然異なると思いました。
- 導入次第で良くも悪くもなる点など、考えれば考えるほど授業にそっくりだと思えました。
- 活動内容や終着点を決めてからでないと、導入の方向性が決まらないのだと感じました。
- 教師用指導書に出ている導入でも、その教材の目的とは無関係な導入があることに驚きました。目的に直結した導入でなければ意味がないので、何を教えたいのかを把握することが大切だと思いました。
- 今回の授業で見た導入指導は、とても面白く感じた。それらに慣れた中でもう一度見ると、出版社の教師用指導案はとてもつまらないもの感じた。
- 導入は、生徒の関心をひくことだけでなく、最終的に教えたいことに結びつけることが重要なのだという事が、最も印象的だった。
- 教えたいことをふまえた本質的な導入をしたいものですが、やはり難しいことだなと思います。
- 導入は、表面的な内容ではなく、もっと本質をつくべきだと学びました。

落語家によって落語ネタの扱い方は異なり、そのときどきの聴衆の層の違いに合わせて、臨機応変にネタを微調整したり枕を変えたりもする。同様にして、国語教師もまた、そのときどきの学習者の学力や特性によって臨機応変に教材の扱い方を微調整したり、導入を変えたりするスキルが求められる。落語家が落語ネタというテキストの媒介者であるとするれば、国語教師は教材テキストの媒介者である。

受講生はそのことを十分にふまえつつ、導入は決して時間つぶしの雑談ではなく、その教材・単元の目的を見据えて慎重に開発すべきものであることを理解した。そして、それが教材と学習者の双方を熟知して初めて可能になる作業であることにも気づいたようである。

以上、2013年度のこの科目の成果について3点に分けて検証した。

### (3) 授業実践を踏まえた課題点の発見—落語家の視座から

#### 3-1 一人芸とマクラ

中等教育の国語科の教員養成に、落語の力を援用したいから協力してほしいと打診を受けた時、上西に思い浮かんだことが大きく二つあった。まず、その一つは、噺家も教師も基本は観客や生徒たちに、たった一人でネタや教材を届ける一人芸であるという共通点があるということ、そして、もう一つは、授業の導入部分と落語の「マクラ」と呼ばれる冒頭の部分とに同一性があるということである。「マクラ」というのは、噺の本題に入る前の導入部分のことで、落語の多くは、マクラ＝導入部、本題＝展開部、オチ＝終結部から構成されている。マクラの振り方が上手く行くと、観客がいま、ここから、時代も場所も異なる世界へとスムーズに移行することが可能になり、また噺家が本題のテーマをどう把握しているかを予め知らせたりすることもできる。つまり、本題を自分なりに解釈して、どこを伝えたいのかを意識化した上で、目の前の観客にとってその世界に入っていく要素があればそれに予備知識を与えるなどの工夫を施すといった、重要な前提となる箇所と言い換えてもよい。

以下、2010年度に実施した準備のためのプロジェクト、それを踏まえた2012年度の正規授業、2013年度の正規授業と分けて、その試みの概要と成果および反省点を挙げておきたい。

#### 3-2 準備のためのプロジェクト

2010年4月に、金井の「国語科の教員養成に落語の力を活かすプロジェクト」への参加呼びかけに応じて、当時、山崎学園富士見中学高等学校で現職の国語科教諭をしていた中村佳文氏(2013年度より宮崎大学教育文化学科教員)、早稲田大学大学院教育学研究科博士課程に在籍していた国語教育を専攻する甲斐伊織氏、同修士課程に在籍していた近代文学を専攻する間嶋剛氏、同修士課程に在籍していた中世文学を専攻する富里美由紀氏らが集まってくれた。上西の当初の目論見としては、短い地噺を覚えてもらい、それに参加者がそれぞれの観点からマクラを考えて付け加え、上演してもらうというものであった。

地噺とは、会話やしぐさなどによる落語本来の演出をとらずに、説明によって話を展開させて行くジャンルの落語のことを言う。代表的な演目として「紀州」や「目黒のさんま」、「源平盛衰記」などがある。落語は本来、登場人物の対話によってストーリーが進められて行くものが主流であるが、地噺では演者が状況や登場人物の心境の説明をすることで、筋が展開して行くのである。

上西が課題として地噺を選んだ理由は、登場人物が変わる際に、会話を際立たせるためにからだの向きを変える(「上下を切る」と言われる落語の基本動作)ことや、登場人物になりきって声色を変えたり、扇子や手ぬぐいを用いるなどして、そばをたぐったりお茶を啜るような独特の

所作を習得することに、多くの時間をとられたくないと考えたからである。

現実問題として、正確に上下を切ることや落語らしい声色・所作で演じられるようになるためには、かなりの修練を要する。今回の「国語科の教員養成に落語の力を活かす」ことで求められているのは、国語の教員志望の学生たちに「落語らしく見える／聞こえる」ように落語家の真似をしてもらうのが目的ではなく、自身の声やしぐさの特性や課題を把握・改善し、伝えるべき本題（教材）の何が大切で、目の前の生徒たちにはどのような予備知識を与えたり布石を打つことが効果的であるかについて、マクラの創作・実演を通して学んでもらうということである。

参加してくれたメンバーのうち、中村氏には「紀州」を、間嶋氏には「目黒のさんま」を、富里氏には「源平盛衰記」を課題とし、CDの音源があった名人たちの口演記録をそれぞれノートに起こすという作業をしてもらった。甲斐氏は高校時代から落語に親炙していたこともあり、当人の希望もあって、「舟徳」という古典落語の演目を上演できるように指導することとなった。

「紀州」、「目黒のさんま」、「源平盛衰記」の音源から台本作りのためにノートに起こす作業は、演者たちがことばの説明や笑いを挿入するために加えた部分を削ぎ落とし、その後に自身が現在の生徒たちにとって必要と思われる部分を付加するようにと指示を出したのだが、これには予想を超える時間と労力がかかってしまい、参加者に大きな負担となった。ことに「源平盛衰記」の音源として、初代林家三平のものをを用いたのであるが、同師の破天荒な芸風は筋立てを大きく逸脱していて、書き起こすこと自体が困難を伴ったようである。担当した富里氏は修士論文のテーマが「平家物語」だったので、新たな試みとして、「那須与一」をテーマに新作落語を創作・上演してもらうことに路線を変更した。

「紀州」と「目黒のさんま」に関しては、こちらの予想通り、

- ① 音源からの台本作り
- ② 本題の中で何を伝えるべきか、その際に必要な予備知識を踏まえたマクラの創作
- ③ 完成した台本の朗読（高座に上がる形で）
- ④ 台本を暗記しての実演

といった展開になった。

①の台本作りの段階および②の本題の中で何を伝えるべきか、その際に必要な予備知識を踏まえたマクラの創作、③の完成した台本の朗読において、予想に反する発見があったのは、現職教員の中村氏のもののが内容を盛り込み過ぎ、また説明過多で、当人が意識しない口癖が参加者相互のコメントにおいて指摘されたことである。現職教員としての四半世紀のキャリアを持つ中村氏は早稲田大学の教職関連科目「授業に活かす朗読講座」を担当していることから分るように、ことばを声に出すことに関する業績やスキルがあるのだが、むしろそうした長年の蓄積が、「転ばぬ先の杖」の諺ではないが、内容のすべてを聴衆に理解させようとするあまり、切り詰められた情報から、聴衆自らが想像するという余地を奪う場合があったのである。当人が意識しない口癖なども、授業の場で聞けば、その先生らしさとして受け止められる場合もあるだろうが、「落語の実演」という、国語の授業内容を離れたパフォーマンスの試みの中で出て来るものに気付くことは、教員の再研修として重要ではないかと思う。

実演に際して、全員に繰り返しコメントしたことは、聴衆全体に届いて余りある大きな声を出

すこと、台本を見ながら行う段階でも、暗記して上演する段階でも、出来る限り自分以外の「誰か」の前で実践する機会を一度でも多く持つことの2点である。

上西自身が入門直後から、一貫して師匠に言われ続けたことは、「大きな声でお客さんに届くように」ということである。落語も授業も、基本はマイクなどを使わず行う一人芸である。聞き取れないことばがあると、観客や生徒は置いてけぼりを喰って、興味を失うことになるのである。また、準備が不十分で自信が持てない時、人の声は必ず尻すぼみになる。最初から最後まで、「大きな声」を維持することには、様々な含意がある。

準備のためのプロジェクトの成果発表会「よむよむ寄席」は、2011年3月19日に予定されていたが、11日に東日本大震災が発生し、会場であった早稲田大学の建物が立ち入り禁止になったことなどもあって、2012年3月3日に延期となった。震災やそれに続く原発事故の影響で、笑いに関連するイベントや番組が中止や延期となり、上西は今日における落語の意味を根本から考え直す経験をしたが、そのことは企画者である金井や、プロジェクトの参加者たちにとっても大きな経験であった。

### 3-3 2012年度の授業実践から

2012年度に正規授業としてスタートしたときの、受講生の何人かは、2012年3月3日に実施された準備のためのプロジェクト受講者の発表会「よむよむ寄席」に観客として参加してくれたメンバーであった。彼ら彼女らは、準備のためのプロジェクトのメンバーとは異なり、到達すべき一応の「完成形」（浴衣を着て、高座に座り、自身で創作したオリジナルのマクラを振って、本題を語る）を目にして出発したことになる。

準備のためのプロジェクトの際に分ったこととして、15分程度の演目を暗記して、聴衆の前で実演するというのは、半期の授業内で到達目標に設定するにはハードルが高すぎるということだったので、単位取得のためのボーダーラインとして、

- ① 音源からの台本作り
- ② 本題の中で何を伝えるべきか、その際に必要な予備知識を踏まえたマクラの創作
- ③ 完成した台本の朗読（高座に上がる形で）

までとすることにし、④の台本を暗記しての実演は、後期授業の際に自主練習をして上演に備えることとした。

取り扱った地噺は、「目黒のさんま」「紀州」「テレスコ」である。やはり、①音源からの台本作りには、かなりの時間がかかり、もう一人の担当者である榎本から、「あらかじめ起こしたものを配布するなどして、この部分の作業を軽減するという方策はとれないだろうか」という打診もあったが、音源から台本を起こす作業は、本題と正面から向き合う不可欠なものであるという認識から、やはり正規授業においても実施した。ここで、耳で聴くだけならば流してしまい勝ちな、先達たちの同時代の聴衆に届けようとする工夫を学んでほしいという思いもあった。

2012年度の実習生12名は、前期に教育実習に行くために3週間ブランクとなる者も含めて、①から③に関して、懸命な取り組みをみせてくれた。ことにこの年度は、3、4名が同じ演目に取り組むことになった訳であるが、それぞれ見事なまでにマクラの内容が異なっていて、まったく

同じ本題であっても演者によってどこを焦点化するか、また、聴衆に対してどのようなナビゲーションをするか、比較対照していて飽きることがなかった。

一方で、繰り返し受講者たちの、地噺の本体を聴くにつれて、上西自身が気付いたことは、やはり地噺は理屈で組み上がっている話であるということである。「紀州」を例にとっても、七代将軍・徳川家継の急死後、尾州侯・徳川継友と紀州侯・徳川吉宗のどちらが次期将軍となるかについて、やきもきする継友の耳に、鍛冶屋の出す音が当初は瑞兆に聞こえるが、最後には……というのは、やはりある筋立てへと理屈で持って行く話であって、筋自体が笑えるとか、登場人物自体が笑えるというものではない。パロディー風の警句もふんだんに含まれているので、語り自体も説教がましい箇所がある。となると、受講生たちから、人間の隠された欲望が露見することに対して、落語から教訓を抽出するマクラを作ったり、聴き間違えをブラック・ユーモアとして捉える方向性のものが重なる傾向が見られた。これは、地噺が語り手の一貫した説明や描写で、登場人物たちの内面を祖述するために、演者の解釈の自由度が狭められることと相関関係を持つものである。

このことは、対話形式の落語ではなく地噺を教材に選択したことで、上下を切ったり、所作を伴うなどの負担を軽減した一方で、肝心の解釈の自由度を犠牲にしたのではないかという反省となった。

### 3-4 2013年度の授業実践から

2012年度の反省に則り、2013年度は受講生が取り組む演目に、地噺ではなく、前座噺と呼ばれる「子ほめ」、「牛ほめ」、「猫の皿」、「真田小僧」を取り上げた。前座噺とは、入門し立ての新米である前座向きの演題の総称で、決まった台詞をおうむ返しに繰り返したり、登場人物が限定されているなど、技量不足の前座でもある程度は笑いが取れる、噺自体がすでに面白く良く出来たものである。

準備プロジェクトや2012年度には、名人たちの音源を用いていたため、早稲田大学のLMSであるコース・ナビにそれらをアップロードして共有することは著作権上禁止されていたので、受講生間のリソースの貸し借りが大変煩雑であった。2013年度は、上西が「子ほめ」、「牛ほめ」、「猫の皿」、「真田小僧」のすべてを授業中に演じて、それをアップロードし、受講生がそれらを自由に視聴できるようにした。

- ① 音源からの台本作り
- ② 本題の中で何を伝えるべきか、その際に必要な予備知識を踏まえたマクラの創作
- ③ 完成した台本の朗読（高座に上がる形で）

までを行うという点では、前年度と同様であったが、2013年度の大きな変更点は、講義部分でかなり丁寧に、表現者の心得として「観客を信頼することの重要性」を語ったことと、①が終了して②以降に展開して行く間に、受講者全員で国立演芸場に寄席を観に行ったことである。

地噺から前座噺へと教材を変更した効果は、上西が授業でこれらを実演したときにすぐ、現れた。ともかく受講生たちがよく笑う。つまり、理屈や時代背景の説明がなくても、登場人物たちのキャラクターや言動、筋の展開を、まったく無理なく理解し、面白がっているのである。たと

えば、「子ほめ」や「牛ほめ」は、社会で生きていくと潤滑油になる世辞・愛嬌の大切さが、愛すべき困り者たちによってごく自然に示されている。受講生たちはマクラを創作する際に、これまでの自身の人生や、故事、時事ネタなど、さまざまなものを想起して工夫をしていた。マクラから本体に移った後も、特に指示しなかったにもかかわらず、ほとんどが登場人物ごとに自然に上下を切っていた（本来と逆になっていた者もいたが、暗記して実演するまでに修正することは容易である）。

結果的に、前座噺は、受講生たちにとって、本体の要所を把握することも容易であり、多様な解釈を展開することも可能であったと見て良い。

また、2013年6月上旬の寄席を受講生全員で鑑賞したことの効果も大きかったと言える。当日、上西は他所でしごとがあったために同行できなかった。そこで、引率の金井に、寄席が終了した直後に受講生に向けて、前座から中入り、そしてトリに至る演目の順番や、落語の合間に漫才や奇術などの色物が配されていることについて考えるための、質問事項を記したプリントを配布してもらった。その夜から一週間ほどの期限を切って、コース・ナビ上で意見交換をしてもらった。これに関しては、2章でも記した通り、受講生たちは「落語」を自分たちに課せられた宿題としてではなく、さまざまなキャリアの、そして多様な個性を持った噺家たちが見せてくれる、楽しくそして凄みのあるエンターテインメントとして再認識したと思われる。それ以後、「宿題」の感覚から解放されて、自身の個性を少しでも出して噺を観客に楽しんでもらおうとする姿勢——落語本来の姿勢を持ち得たように思う。「観客を信頼して噺をすることの重要性」は、授業担当者である上西・榎本と受講生たちの間にも応用し得るし、寄席に出演しているプロの演者たちと観客である受講生たちの間にも、そして受講生たちが互いに演者と観客になり合う間にも存在するものである。

そのことは、教室において、教師と生徒が、互いに聞き手と話し手の立場を入れ替えながら、どう信頼関係を築いて行くのかに繋がっているだろう。

#### (4) おわりに

準備のためのプロジェクト、2012年度正規授業、2013年度正規授業と実践を重ねて、当初は「教員養成に落語の力を」というキャッチフレーズの下、試行錯誤を始めた頃には、「落語の力」＝観客に噺を効果的に聴かせる伝統の中で培われてきたテクニックの習得、という漠然としたイメージしか結ばなかったものが、話す／聞くという相互の信頼関係に基づいた場を創る能力というものへと展開していったのは、大きな成果であった。

「授業で落語をやってみようという企画」があるが付き合ってくれないかという誘いを受けた学生たちや現任教員の多くは、やったこともないことへの不安やそれが果たして教師としてのスキルアップにどう結びつくのかの疑問、現役落語家に駄目出しをされることへの心配など、疑心暗鬼の状態であったことは疑い得ない。準備のためのプロジェクトに参加してくれたメンバーの一人は、中間発表の日に音信不通になり、皆で心配していたところ、会の終り頃になって、「どうしても時間が取れなくて準備不足で、お聴かせするような段階に至っていません。申し訳ない」と謝罪し、全くボランティアで実験台を買って出てくれたことを考え合わせると、無理をさせて



しまったと、頼んだ金井を慌てさせたことがあった。その後、スケジュールの見直しを図って稽古を継続し、発表会では当日の観客からいちばん大きな拍手を貰っていたと記憶しているが、この試み自体は、古典作品の読解、自身の解釈をマクラに反映させて創作を行う、それを実演するという、かなりの力量を要する実践である。とはいえ、教材の入れ替えを行ったり、授業のプロックごとに文節化して、その到達目標と所要時間を受講生たちの意見を聴きながら調整して行くことで、これまで以上に楽しくて身になるものへと改善して行くことは可能であると考えている。

落語は噺家が高座の座布団の上で演じる一人芸であるが、その内容、声色、しぐさから世界を想像するのは観客一人一人であり、冒頭にも引いた三遊亭圓窓の言葉通り、「思い描く力」がこれほど試される芸もない。3章の最後にもあるように、話し手と聞き手との信頼関係を創ることへの意識の持ち方が、今後の授業実践においてますます大きな課題になる。

落語の実演自体は、人が人に対する一期一会のものであるが、もう一方で、これを本授業に導入する際に、その理解において大きな役割を果たしてくれたと感じているのは、LMSを用いたネット上の意見交換や、教材となる落語の動画、成果発表の際に録画した受講生たちの実演動画の視聴である。マイクロティーチングに際してLMSを用いたコメント活動が有効であることは、松野浩平・鈴木真理子・宮田仁・神月紀輔「教職課程のマイクロティーチングにおけるLMSを用いたコメント活動——理科教育法を対象にして——<sup>9</sup>」でも明示されているが、本授業が目的とする中等教育国語科の教員養成に落語の知やスキルを援用しようとする場合、演じているときあるいは観ているときの、共に場を創る一体感の重要性と同様に、それを対象化し、場の雰囲気込まれて見落とし勝ちな部分を拾い、バランスの取れたことばで指摘・批評する側面は不可欠なものとなる。顔を合わせる教室での、面白さの創出と共有、それを再確認し、分析した上で再び場に戻して行く流れを創ることを、LMSをより活用していくことも視野に入れ、今後も模索したい。

## <注>

- 1 一般社団法人落語協会所属。十一代目金原亭馬生の門下。
- 2 山本進『落語の履歴書 語り継がれて400年』（2012、小学館）参照。
- 3 吉川潮『戦後落語史』（2009、新潮社）参照。
- 4 三遊亭圓窓「教科書のぞろぞろ」（『圓窓落語 だくだく』、(<http://ensou-dakudaku.net/kyoka/zoro.html>) 参照。
- 5 三遊亭圓窓『話す・聞く・思い描く力を育む落語の授業』（2008、少年写真新聞社）参照。
- 6 文部科学省「国語力を身に付けるための国語教育の在り方」（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/007.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/007.htm)）参照。
- 7 東京都教育委員会「日本の伝統・文化理解教育推進事業」（[http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/shidou/dentou\\_top.htm](http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/shidou/dentou_top.htm)）参照。
- 8 三尾忠男・牧野智和「私立総合大学教員養成課程におけるマイクロティーチングの導入」（「早稲田教育評論」、2010）参照。
- 9 松野浩平・鈴木真理子・宮田仁・神月紀輔「教職課程のマイクロティーチングにおけるLMSを用いたコメント活動——理科教育法を対象にして——」（「日本教育工学会論文誌」、2011・6）参照。

追記：2013年6月7日に実施した課外授業（国立演芸場での寄席鑑賞）に関して、本授業の趣旨を御理解いただき、日本芸術文化振興会国立演芸場部の恩田健一氏にはさまざまな御配慮をいただいた。感謝申し上げたい。